

琉球大学学術リポジトリ

憧憬と忠義と暴力と：ペリー来航と沖縄の作家

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2403

憧憬と忠義と暴力と

—ペリー来航と沖繩の作家—

仲 程 昌 徳

はじめに

ペリーの琉球来航を素材にして作品を書いた作家に上間正雄、山里永吉、石野径一郎、長堂英吉がいる。上間の作品は、一九一二年『三田文学』に、山里の作品は一九三〇年『琉球新報』に、石野の作品は一九六一年『新日本文学』に発表され、長堂の作品は二〇〇一年八月刊行された『海鳴り』の中に「未発表書き下ろし作品」として収録されている。

四名のうち上間は、明治末期から、山里、石野は昭和戦前から、戦後にかけて活躍し、長堂は昭和末から平成現在にかけて活躍中の作家であるが、一体彼らは、「ペリー」の何に、創作意欲をかきたてられたのだろうか。

異国船の来航ということでは、一八一六年「英国海軍に属するアルセスト号とライラ号」が那覇に来航して以後、二二年、二二年にはオランダ船の漂着、二七年、三一年、三二年とイギリス船来航、三七年アメリカ船、四〇、四二、四三年イギリス船、四四年フランス船、四五、四六年イギリス船、フランス船、四七年、四八年フランス船、四九年アメリカ船、五〇、五一、五二年イギリス船といったように、一八三〇年以降は、頻繁に外国船が来航している。琉球側は、そのたびにいたく心をくだいた。そして段々とその対応に適應できるほどの外交能力を養いもし

ていたようであるが、五三年のペルリ来航は、しかしこれまでの外国船の来航とは大きく異なるものがあつた。

ペルリは、琉球王府側の入城拒否を無視して六月六日「即製の四人かつぎの轎に乗つて中国人夫にかつがしめ、各艦長以下随員三十人、武装兵百三十人、大砲三門、楽手二十三人、その他合わせて総員二百十人、泊港から上陸して軍樂を奏しつつ威風堂々首里に向かつた」といったことが示しているように、琉球王国を震撼させるに充分の「示威行進」を断行したのである。

ペルリの首里入城は、琉球王国の役人をはじめ那覇、首里の住人を驚愕させるに充分であつたし、さらにその後起つた「殺人事件」と関つて繰り広げられた琉米間の折衝、その経緯の紆余曲折等、これまでの異国船の来航時にはみられなかつたようなことが起つていた。

ペルリの来航・駐留は、琉球王国を大きく揺さぶつたはずである。その衝撃と混乱が、沖縄近代の夜明けを告げるものであつたことは間違いないが、では、四つの作品は、ペルリの来航をどのように写し取つていたのだろうか。

I 「黒い船」と「三味線」

上間の「戯曲 ペルリの船（一幕）」には、六名一青年、その情婦、町の商人、船頭、老いたる漁夫、一人の僧が登場するだけで、ペルリもその一行も登場しない。彼らに関する情報は、第一段に登場する船頭と漁夫、第三段に登場する商人によつて与えられるだけである。

船頭と漁夫の二人によつて与えられる情報とは、

一―一、「黒い船」が「夜そつとやつて来て山くずれの様な恐ろしい音」を響き渡らせたことで、「子供の泣声やら、女の叫び声やらもう町中の人が一時に火にでも焼きつかれたやうに騒ぎだした」といったようなこと、

一―2、「恰度台湾の生番見たいな奴等だから町にぐずぐずして居る者は皆殺されてしまつ」といったようなこと。

一―3、「髪の毛の赤い鼻の馬鹿に大きい、まるで猿かなんぞのやうな奴等なんだ。背つばい妙なものを着て鷺鳥のやうにがあがあしやべりながら町を歩いて居るが、何をしやべつて居るのか、ちつとも解りやしない」といったこと、同じく船頭の眼を通して語られる「俺は彼奴等の胸の高さ位しか無かつたぜ」といった彼らの体軀に関する事、さらには「着てるものは光るやうで綺麗なものだが、あの青いりゆうがん見たいな眼つきで見られると堪らない」といったようなこと、

一―4、「若い綺麗な女が強姦されて氣絶した事がある」といったようなこと、である。

船頭と漁夫の話は、1 異国船の那覇入港による町の混乱、2 船に乗っている者たちに関する風聞、3 「上陸した人間」たちの風貌、服飾、言語に関する見聞、4 「異国」一人らがいかに危険であるかといったかたちのものになっていた。

第一段に見られる「ベルリの船」に関する情報は、決して芳しいものではなかつたといつていい。しかし、芳しくない情報だけが与えられるのではない。第三段になると、俄然異なる情報が与えられる。

第三段で与えられる「ベルリの船」に関する情報は、商人によるもので、それは、次のような彼らの性質および品物に関するものである。

三―1、「あの船の人達」が、「やさしい」こと、「偉い人たちがかり」であること、

三―2、飲んだことのないやうな「香のいゝ酒」を持つて居ること、

三―3、「海賊の船とか、悪魔の船とか云つて非常に恐がつて」いるが、「どうしてなかく偉い人達ばかり」で

「決して人を殺したり、物を盗むやうな人達」ではないこと、

三—4、「どんな珍しい品物でも呉れる」こと

三—5、「珍しいもの」を運んで来た船には「異国（オランダ）の偉い人が乗って」いてその名前は「ペルリ」だということ、

第一段と第三段とは、「ペルリ」に関する情報の明と暗とをくつきりと浮き出させる仕掛けになっていた。「ペルリの船」が描き出そうとしたのは、しかしそのような「ペルリの船」に関する情報であつたわけではない。

「ペルリの船」の焦点は、多分第二段にある。第二段は、青年と女の対話箇所、

二—1、「親父」は若いとき十年余り中国に留学していた経験があり、世の中のことは大抵知つていて「黒い船」が来るのだから解かつていたし、「此の国の悲しい運命」もよく見えているが、「若いものゝ心持がまるでわからない」やうで、古い中国の思想で若者の心を抑え付けようとしている、

二—2、そういう「親父」と一緒にいては、「夜の楽しさ」を味わうことも「夜を自由に楽しむ」こともできない、二—3、「あの船」は、「琉球の占領を目論んで」いて「なかなか帰らないだろう」が、船が帰る時には、「お城の頂には白い悲しい旗が立つやうになる」はずで「さうなれば日本党や支那崇拜の老人達は死ななければならぬまい」だろうし、さうなれば、「若い者はどんなに嬉しいか知れない」といったやうなことが語られていく。

「黒い船」の出現にも動ずる気配を見せない青年の「親父」のことや、その時代の帰趨がそこには語られていたが、そのことが引き起こす青年の焦燥も語られていく。

青年は、「あの船に乗つて何処へでも行つてしまひ度い」と繰り返す。女が「何処かへいくのは怖いし」「この

島で得られるもので満足しなければ」ならないという、此の島に何がある。水々しい少年の心を枯らすやうな習慣と、支那や日本の古い思想がごつちやになつた冷たい道徳とがあるばかりだ。腐れかゝつた支那やこまちやくれた日本と云ふ小さな国の思想が何になる。それを今の摂政とか三司官とか云ふ、大きな顔をした連中が、無闇に有難がつて居るんだからな。私もし御役所で親父の半分の勢力でもあつたら、彼奴等を突き飛ばしてやるんだがな。そして若い男と女とが互いに許婚でありながら、ものを言ふ事さへ出来ないやうな此の国の習慣を片つぱしからぶち破はすんだがな」と青年はその心中を吐露する。

そこに、酒を一口飲ませてくれといつて登場してきた漁夫に、青年は酒はいくらでもやるから「今晚あの船まで乗せて行つて呉れ」と懇願する。漁夫はそのことを商人にも頼まれたといい、そんなことが役人にでも知れたら、「頭」が飛んでしまいかねないので返事をしてないという。

第二段は、「古い思想」と「冷たい道徳」から「自由」になるために、「ペルリの船」に乗り込みたいと思う青年の夢が語られていた。

第四段は、青年と商人の言葉に心を動かされた漁夫が、船の用意をしようと決断した所に、老僧が現れ、彼らの計画を弾劾するところから始まる。

老僧は、彼らに「異国の船」に乗り込もうとしているが、あれが「悪魔の船」であるということを知らないのかと脅すだけでなく、「お前達は罪人だ」と弾劾し、「此の琉球の国を売らう」とする謀は許せないし、「御役所」に訴えないわけにはいかないという。青年が、彼らを誣責してやまない老僧の胸を鉄拳で衝いたところ、打ち所が悪く死んでしまう。商人も漁夫も、「役人に目つかると大変だ」といい、「ぐづぐづしてるとひどい目に逢ふ」といつて去つてしまう。青年が彼らのあとを追おうとするのへ、女が、私も行くので、少し待つて欲しいという。青年は、

これ以上死骸を見ていることはできないという。

そのあとに、次のような青年と女との対話が続く。

女。でも少しお待ちなさい。そして気を沈めてあの音を聞いてご覧なさいな。三味線の音が此処まで聞えて来るぢやありませんか。

青年。三味線の音！

女。え、よく聞えるでせう。もうどうしたつて、あの音が聞かれなくなるわね。

(兩人恐ろしき事件を忘れ去りたるものゝ如く、悲しき三味の音に聞き惚れる。)

青年。私たちの心はどうしてもあの三味線の音から離れることは出来ないんだな。

女。(涙ぐむ) 私達はもう、どうなつて行くのでせう。私、あの赤い燈火を見ると、恐ろしいやうな、悲しいやうな心持ちがしますの。

青年。私もじつとかうして考へてると、まるで長い夢から醒めたやうだ。そしてあの廊の三味線の音が、胸をえぐるやうに、なつかしく聞える。

女(甘へるやうに) 私達は廊へ帰りませう。

青年。廊へ！

そのあと、さらに女が「え、どうぞ、帰つて下さいな」とさそいかけるのへ、青年の「……無言のセリフがしるされ、幕が下りる。

第四段は、第一段と第三段とが対応していたように、第二段と対応している。「あの船に乗つて何処へでも行つてしまひ度い」と激しく夢見る青年が、「どうしてもあの三味線の音から離れることは出来ない」というように、

「黒い船」への憧れから一転して「三味線」に惹かれていく心が写し取られていた。

青年のその心の動きようは、多分同時代の文学青年たち、とりわけ「パンの会」の青年たちの心を彩った「異国情調」と「江戸趣味」との混在といったありようの形を変えたあらわれだといえ⁵ばいえる。「ベルリの船」は、同時代を席捲した思潮を取り入れて書かれていたといつていいだろうし、「ベルリ」の来航は、それを取り込むのに絶好の素材として使われたのである。

「ベルリの船」に、史実を求める事は出来ない。上間が、ベルリの『日本遠征記』を読んでいたことは、「強姦」事件を取り込んでいたことからそれとなく窺えるのであるが、彼には史実に寄り添おうという考えは全くなかったといつていい。それは、ベルリの一行の登場がないということからも窺えるが、何よりも、彼らに対応した首里の役人たちの姿が見られないことによく現れている。

「ベルリの船」は、その表のところでは、「親父」と「息子」の対立を通し、旧対開明、或いは未開対文明、前近代対近代の確執といったことに焦点をあてるかたちを取り、その裏で、文明、開明、西洋、自由といったものに憧れを抱いて、いまある不自由からの脱出、固陋な社会を打ち破ろうと志しながら、なお古い伝統に心を惹かれてしまうものがあることに呆然としてしまわざるを得ない、その戸惑いと悲しみを刻み込もうとしていた。「ベルリの船」の要点は、そこにあつた。

明治の「新青年」たちの異国への憧れと身についた伝統とに引き裂かれる懊悩を浮き彫りにするのに、「ベルリの船」の来航にまさる絶好の素材はなかつたのである。

II 「実力を養うこと」と「忠義」

上間の戯曲は、必ずしも「ペルリ」をかぶせる必要はなかった。一八三〇年以降あいついで入ってきた外国船のどれを素材にしても不都合が生ずるほどのものではなかったといつていい。それほどに「ペルリ」の一行の動向については無頓着であった。上間は、明治の青年の憂悶や焦燥に関心があつたのであり、琉球の「政体」に関心があつたわけではないのである。

上間は、そのように、「ペルリの船」ではなく、「ペルリの船」によって触発された青年の煩悶に焦点を絞つた作品を書いていたのであるが、それから二〇年たつて「ペルリ日記」を書いた山里の関心は、自ずから上間のそれとは異なるものとなつていた。

「ペルリ日記」は六幕十一場で構成されている。その十一の場を簡単にたどつていくと、

一、1 ペッテルハイムが、石垣に繋がれた牛をモデルにして印籠のねじめを彫つている彫刻師田名に声をかける、二人の間で芸術、伝道、薩摩をめぐるやりとりがなされる、2 ペッテルハイムと会話をしたかどで田名が役人の注意を受ける、3 アメリカの軍艦が入ってくるのを見たペッテルハイムが、夫人のメリーとともに、英国の国旗を岩の上に立てる、といつた3景からなり、

二、1 日本の船らしいのが二艘停泊し、艦隊の動静を窺つているかにみえること、市街では、逃げ回つている者の姿がみえるといつた、港や陸上の様子が士官からペルリに伝えられる一景、2 ペルリとペッテルハイムとが会見、基督教の伝道のため八年前から此処に来ていること、琉球人は基督教を信仰することを喜んでいるが、官憲がことごとく邪魔してうまくいかないこと、薩摩が裏から操つていだけでなく、薩摩は琉球を植民地だと思つていると

いつたことがベッテルハイムによつて語られる、ペルリの「琉球人は吾々を恐がる」だろうかという問いに、ベッテルハイムは、多分怖がることは無いだろうし、琉球人は非常に人懐こい人種であるといった対話がなされる、
3 琉球の三司官小禄親方、源河親方、通事牧志朝忠がペルリと対面、琉球側の食糧、水はいくらでも提供するといふ申し入れに、ペルリは感謝するとともに「首里城を訪問する事」「海岸に水兵達が泊る家を一軒」借りたいと要請、琉球側は両者ともに受け入れがたいと拒否、ベッテルハイムには貸してアメリカ人には貸せないのかとペルリが質したのへ、牧志が、英語で事情を説明して一同を驚かす、牧志はまた、艦隊員が自分の読んだ本にあつた「ワシントンのやうに偉い人達」だと思ふという、ペルリは、牧志がワシントンを知つてゐるのを聞いて嬉しいといふ、自分たちもワシントンのように「皆セントルマン」であるといつたやりとりがなされる、ペルリと琉球の役人との会見の様子が取り上げられ、一幕と同じく3景からなる。

三、田名と牧志との対話場面で、田名が、「一体米利堅の軍艦は何しに琉球」に來たのだろうかという問いに、牧志は、そのことについてはまだ何も聞いてないと答える。田名が「攻め取りに來た」のではないかというのへ、牧志は、これまで薩摩のために苦しんできたが「又新しい心配が一つふえて來た」とかわし、琉球は「利益の爲めに操られる傀儡」だといふ薩摩をめぐる話から中国の現状に及ぶ。中国はもはや頼りにならないし、実力を養ふ必要があること、実力を養うためにはいぢめられても苦しめられても穩忍自重し「五十年経つてでも、百年でも二百年でも良い。吾々は実力を作る事に努力するのだ。そうしたならば何時かは吾々民族の上にも花の咲く時節がめぐつて來るだらう」といふ、熱い言葉が語られる。

四、首里城の大広間で座喜味、小禄、牧志、摩文仁の四名が、アメリカとの「通商」をめぐつて討議をくりひろげる場で、小禄がペルリ側の要求を受け入れることが上策ではないかという意見に、座喜味が眞つ向から反対、そ

れに牧志が意見をのべたことで座喜味が激怒、摩文仁がなだめるといったかたちで、開明派と旧守派との対立が描かれる。

五、国王に挨拶したいと上陸してきたペルリの一行へ、病氣中を理由に拒否。挨拶できないのは残念だが、軍艦に準備してある贈り物は受け取れるだろうかというペルリに、それは有難いし、こちらも贈り物を準備してあるという。ペルリは、「友邦に無茶な事」はしないし、要求を聞いてくれさえすれば満足だし、長い間滞在するつもりもなく当分の間「根拠地」として使いたいだけで「三ヶ月」の滞在を予定しているという。牧志は、ペルリに、帰航の際にはベッテルハイムを上海まで送って欲しいと要請、ペルリは、ベッテルハイムの意見を聞いて、要求にそうよう努力したいという。

六、酔っ払った水兵の一人ポールドなるものが、偶然ぶつかつた娘を抱きしめる。娘が驚き叫び声をあげると、沢山の人が寄つてきて、彼を棒で殴り殺してしまう。酔っ払った水兵と一緒だつたあと一人の水兵が士官をつれて登場し、ポールドが死んでいるのを見つける。

七、小禄の供の者武太が、城内の評議で何か変わったことでもあつたのかと問うのへ、小禄は「困つた問題が起きた」といい、事の顛末を話したうえで、下手人を上げる事が出来ずに苦慮しているという、ならば私がその下手人になりましょうと武太が申し出る。小禄は、それがいかにたいへんなことかを説くが、武太は、「お国の為に」尽くしたいといい、「鬪り殺し」であれなんであれ、決して恐れる者ではないという。そこへ偶然通りかかつた役人に、武太は自分が「アメリカの水兵を殺した下手人」で、これから自首するつもりであつたこと、ついではお願ひがあるといい、自分には年老いた両親がいるので、暇乞いをさせてほしいという。役人が小禄に伺いをたて、許しを得る。

八、武太の父と母が今年の作物の不作や「うらんだ」の様子、親方が苦勞しているということを話している所に、武太がやってきて、今度里之子のお供をして「唐の国」へ行くことになったという。断つたほうがいいのではないかとこの両親に、立身のためだし、両親を樂にさせるためなので、心配することは無いという。

九、ベッテルハイム、小祿、座喜味が武太を尋問。ベッテルハイムが、尋問に立ち会つたグラツソン大尉と話し合つた後、ベルリの考えでは「琉球の人は琉球の法律で罰するやうに」とのことなので、そのようにするがいいといい、琉球ではどう処罰するつもりかと聞くと、死刑だという。それを聞いたベッテルハイムは、彼は悔い改めているので、寛大な措置を取るがいい、という。小祿は、その言葉にそうやうに処分したいという。そのあとに次のやうな会話が續く。

ベッテルハイム 是非そうして下さい。然しこれからの事もありますから、琉球人はもつと外国人と仲よくするやうに氣をつける非常によいあります。吾々はこれから軍艦に行つてベルリ提督に今日の事を申し上げて来ますからこれで失礼します。

小祿 武太、あゝお前は果報者ぢや。他人の爲善根をつむとそれだけの報ひがあると言ふ事は聞いてゐたが、今日といふ今日私は初めてそれが解つた。——お前は命拾ひをした上、又それに対する御褒美もあらう。あゝ人間は善い事をするものだ。——筑佐事武太の繩をほどいてやれ。

武太が、自分は許されたのかと問うのへ、小祿はそうだと答え、当分アメリカの見えないところに匿つて、彼等が歸つたら、その功勞で士族にとりたててやろうというのへ、武太は「士族になつて苦勞するより」金を貰つて「両親と共に樂」がしたいという。

十、青年一と青年二の間で、武太に沢山の金が与えられたといつた事やベルリの一行が引揚げる事、ベッテルハ

イムもその時一緒するようだと聞いたことが話されていく。

十一、ベルリの艦隊の出帆の場で、牧志とグラツソンの間で別れの挨拶が交わされたあとに、ベッテルハイムがグラツソンに「八年間も住んでゐたところですから別れるとなるとやはり寂しくなります」というのへ、グラツソンが「左様でせう」という言葉で幕になる。

山里の「ベルリ日記」が、史実に沿う形で書かれているのは、例えば「艦隊が入港したとき、一軒の家の近くにある旗竿に、突如としてイギリスの国旗が掲げられたのが見えた。その家は町の北に突出した妙な岩の上に位置してゐた。この家は牧師ベッテルハイム氏の住邸であつた。(中略)アベイ岬を過ぎると内港の入口が見えるやうになつた。そしてその中では数多の大きな日本船が錨を上げてゐた。その旗竿の下には、艦隊の行動を監視してゐる二人の人が見えた。又望遠鏡で見ると、白い傘をさして町から逃げて行く多数の人を見ることができた」といつた箇所が、ほぼそのまま使用されていることからでも明かであるが、しかし、史実そのままでないこともまた、第一幕第一場の始めに登場する田名について、山里がわざわざ「彫刻師、田名宗経は尚温王四年西暦一七九八年に生れ、尚泰王十八年西暦一八六五年に没してゐるから其年には五十六歳になつてゐる訳であるが、脚色の便宜上二十七歳の青年にした。読者之を諒せよ」と注してあることやその他の登場人物名、さらには、ベルリが、江戸と往復している間に、三司官に変更があつたりしているのだが、作品に登場する人物には変更がないといつた点にあらわれていよう。

山里は、史実に添うかたちをとりながら史実を写そうとしたのではない。彼が写しだそうとしたのは、多分次のようなことであつた。

「実力のある国だ。実力のない者は実力のある者にすがらなければ自滅する外はない。それは自然の法則だ。

——だから実力もなく自滅もしたくない者は結局実力のある者にすがつて行く事になるのぢや。

お若い方、実力だ。実力があれば何も恐い事はない。だから第一実力を養ふ事だ。今はどんなにいぢめられても苦しめられても、おたがいの仲間喧嘩を止して穏忍自重して実力を養ふんだ。五十年経つても、百年でも二百年でも良い。吾々は実力を作る事に努力するのだ。そうしたならば何時かは吾々民族の上にも花の咲く時節がめぐつて来るだらう」

薩摩に操られ、薩摩に苦しめられてきた琉球、頼りにしてきた中国もはや頼りにならなくなったということになれば、「これから何処を頼つて生きて」いけばいいのか。田名のその問いに、牧志は、百年いや二百年かかるとしても、「実力を養ふ事」がまず肝要だと答えていた。

圧倒的な武力を背景にしてやつてきたベルリの艦隊を眼前にして、実力を養えば「何時かは吾々民族の上にも花の咲く時節がめぐつて来る」に違いないと考える。「ベルリ日記」の要点の一つはそこにあつたといつていいだらう。

「ベルリ日記」は、後篇の第三幕から舞台が変わつて、いわゆる「ポールド事件」として知られる殺人事件が取り扱われていく。この事件が、王国の官僚に大きな衝撃を与えたのは間違いないはずであり、「ベルリ日記」は、そのことを次のように「三司官」の一人小禄に語らせていた。

小禄 武太、世の中の事は一寸先は暗だ。大きな事件を少しの手違ひもないやうに嚴重に計つて行つても、一寸した過ちの為にすつかり打ちこわされて了ふ事がまゝあるものだ。

今度の事も丁度それだ。——御国の為、御主加那志の為、何事もないやうにと全ての屈辱を忍び、万難を排してやつとベルリとの問題を解決したかと思ふと親の心子知らずで、お前も知つてゐる通り那覇で到々

アメリカ人を一人殺して了つた。

武太 然しそれはアメリカの水兵が無理な事をした為と聞いて居ります。

小禄 其処だ。お前は無理と言ふ。弱い者から見れば、強い者のする事はすべて無理に見える。然し強い者としてはそれがあたりまへの事なのだ。だから弱い者は強い者の無理から逃れやうと心をくだいて色々な手段をつくす。それが弱者の悲哀だ——ペルリは必ず下手人を出せと言ふ。もし吾々が出さない時は彼等はそれを理由としてどんな事をするか知れない。吾々にはそれが一番恐ろしいのだ。

「ペルリ日記」の前半部分は、右の小禄の言葉に見られるように「屈辱を忍び、万難を排してやつとペルリとの問題を解決」していった経緯を扱っていたといつていい。それに対して後篇は、殺人を犯した「下手人」を上げるのに難渋している「旦那様」のために、一身を犠牲にしようとする下級者の一途な姿を描いていた。

武太 旦那様、その下手人として私を毛唐に引き渡して下さい。

小禄 お前を！ お前は気でも違つたのか。

武太 気が違つたとも思はれませう。然しこの武太はいくら賤しい身分でも御国の為なら死んでもおつくししたいと日頃から考へて居りました。——旦那様！ 是非このお願いを聞き届けて下さい。

下手人を上げることができないと、ペルリがどんな難題をふっかけてくるかわからない、それを考えるといつても立つてもいられないという小禄の言葉を聞いて、武太は「御国の為」なら死んでもよいと申し出るのである。「ペルリ日記」の第二の要点は、ここにある。

「ペルリ日記」は、他国を頼ることや傀儡としてあることから脱却するには、百年いや二百年かかろうと「実力を養ふ事」が肝要であるということ、そして「国難」ともいえる事態にあつては「御国の為」に一身を投げ出す

覚悟が必要であるということを訴えようとしたものであつたといつていいだろう。そしてそこには、多分に昭和初期の沖縄の状況が重ねられていたはずである。

明治末期の「新青年」が、近代への憧れを託そうとした対象が、昭和初期には、「忠義」の発露をうながすものになつて来た。それはやがて戦争に突入しようとしていたことを先取りするようなものになつて来たというのではなく、沖縄の経済的な疲弊が、救いようのない状態になつて来たことで、その建て直しが問われて来たことによるものであつたといつていいのではないだろうか。

「ペルリ日記」には、薩摩への批判とともに中国が「情けない事」になつて居ることが語られていた。そのことに關していえば、通説を出るものではなく、それほど特別なことが語られていたわけではないが、「ペルリ」を見る見方には、特別なものがあつたかと思われる。

ペルリの交渉が、武力を背景にしてなされていたことは比嘉春潮などの『歴史』書に書かれている通りだろう。言うことを聞かなければ、海兵を率いて首里城を占領するといわれて震え上がらなかつた役人はいなかったはずで、ペルリが、相当に暴君に見えたとしても不思議ではないが、「ペルリ日記」には、そのようなペルリはいない。極めて礼儀正しいペルリがいるだけである。

山里が、王府の拒絶を無視して入城したこと等にペルリの横暴さを感じなかつたはずはない。ペルリの武力を背景にした振る舞いを取り上げないで、どうして礼儀正しいペルリを描いたのだろうか。沖縄の歴史を素材にした劇を発表し始めていた山里が、歴史に疎かつたわけではない事からすると、山里にも「ペルリの船」の青年のような「異国」アメリカへの憧れがあつたということなのだろうか。確かに山里に、外国への憧れがなかつたとはいえないが、そのことよりも、ここでは薩摩の支配下にあつて「傀儡」として扱われたことへの怨念の深さが、いきおい

ペルリの像を礼儀正しいものにしていったといつていいだろう。

III 「奴隸」からの解放、「中心」への直結

石野径一郎の「琉球の孤独」は、山里の「ペルリ日記」から三十年たつて発表されている。その間十五年にわたる戦争があり、その後、沖繩はアメリカの施政権下におかれ、占領状態が続いているといった状況にあった。

太平洋戦争前の作品とその後の作品とでは、周知の通り大きな違いが見られる。「ペルリの船」をめぐる作品も、当然、戦前の作品とは異なるものになつていっただけである。とりわけ、沖繩が、占領状態にあつたことを勘案すれば、変わつて当然であつた。

石野の「琉球の孤独」は、八章で構成されていた。

一はペリー艦隊の那覇への来航から首里への行進、首里城北殿での会見、二は艦隊が貯炭所を泊村に建設、寄港地を確保するとともに、第二回目的「日本訪問」のため米国艦隊が那覇を出発した後「水師提督ブーチャーチンのひきいるフレガート艦「バルダラ号」とスクーター船「ウオストーク号」の二艘」が来航、翌日ベッテルハイムがブーチャーチンを訪問、琉球に関する情報を交換したこと、三は板良敷通訳官と北京留学時の知人露国人とが旧交を温めたこと、露国艦隊の出航、白人水死体の発見、四は水死体事件発生の際、五はロートン軍医の解剖結果でポアードの水死が偽装であることが発覚し、グラッソン少佐が再調査を要求したこと、六は、1「神奈川条約」を締結して那覇に戻ってきたペリーが、事件を知つて激怒、「琉球政庁に乗り込み、嚴重に抗議をし、談判せよ」と命令を発したこと、2板良敷通訳官と「板良敷崇拜者の一人」で、事件が起こる前「三人の水兵に酒をふるまつた青年」渡口とが、板良敷の愛人奈美のいる「辻町の一娼館」で懇談する場面、3両国代表の学校所での会見と拷問

とが描かれ、七は、死体に関する琉球側の証言に業をにやした「米国海軍陸戦隊」が、首里城外に陣を敷き威嚇するなか、評定所の会議がはじまり、紛糾し、制限時間がなくなつたことで、事件に関するこれまでの報告は白紙に戻し、改めて両国が協力して裁判にあたりたいと提言、陸戦隊側は「二十四時間以内に犯人をミシシッピー号まで連行」してくることを最後通告、八は犯人に仕立てられた被害者の知人で最初にポアードに飛び掛つて投げ飛ばされた石川が自殺してしまつたことで、「犠牲者石川の身代わりとして政庁の苦境をすくおうと、主犯を名乗つて出た」「熱烈な愛国者」渡口をはじめとする一行の裁判の一部始終と、その後の動向——「琉米和親修交条約」の締結、ベッテルハイムの仕事、ポアード事件関係者の無罪釈放、仏国探検船の来島、薩摩藩主斉彬からの指令書、それに対する琉球側の回答、最後にその頃はやつた俗謡——を列記して終わつてゐる。

右の簡単な要約からある程度推測することができようが、「ペルリ日記」と「琉球の孤独」とは、その骨格をほぼ同じくしてゐた。ポアードの婦女暴行、ポアードの死体の発覚、死体を巡る画策、主犯の不在、代役の登場、裁判、判決といつた物語の骨格をなす部分をほぼ同じくしてゐるといつたことで、それは「ペルリ」の読まれ方が、不思議と変わつてないということを示しているが、しかし、そこに登場して来る人物たちの発する言葉までが同じであるというわけではない。

「ペルリ日記」の山場がそうであつたように、「琉球の孤独」もまた、主犯に成り代わつて登場する人物と彼が敬愛する人物との間でかわされる会話の場面が、作品の山場をなしてゐて、それは次のようになってゐた。

「一体、だれが兵隊を殺したんでしょう。犯人は自殺だ自殺だと云いはつてゐる者の中にあると思ひますが」「ま、そうかも知れないしかしそうなる、ばくもその容疑者の一人ということになるな」と、寂しそうに笑つたので、渡口はあわてて否定した。

「薩摩の——」と云う渡口へ、

「まあま場所柄を考えて」と、おつかぶせた。しかし渡口は真剣で、さらに

「少年ジョージ・ワシントンの正直物語を国民の美談にしている国柄だとしたら、真相をぶちまけた方がいいのではないですか」

ワシントンの話は、板良敷が弟子たちに米合衆国の歴史をはなした時に出たのであつた。板良敷の眉宇には当惑の色がうごき、しばらく口ごもつていたが、

「君の云う通りだと思ふ。しかし、だからと云つて、琉球独自の立場では何も云えない現状だ。ただ思うことは、一日も早く薩摩の奴隷から解放されなければならないという一点だよ」

「と云つて、先生がいつもおつしやるように日本の中心（幕府）と直結したとしても、米国にたいして独自の発言が出来るとは思えません」

「そんなことはない。祖国とつよい連帯性を持つということは強力になることだ。祖国と運命をともしることにもなる。現在の国籍不明は一番こまる。しかも英国・米國・露國などでも、琉球が薩摩の支配下にあつて、名ばかりの国だということを百も承知なんだ」

「知らないのは中国だけですか」

「中国だつてどうかね。享保の頃琉球に來た皇帝の副使に徐葆光という学者がいて、ちゃんと見ぬいて知らんふりをしていた」

「琉球の孤獨」が発表されたのは一九六一年三月である。前の年六〇年は「日米安保条約」をめくつて苛烈な闘争が起こつた年であり、沖縄では「沖縄県祖国復帰協議会（復帰協）」が結成された年であつた。「二千五百キ口踏

破の沖縄返還要求大行進が東京につき、四月二十八日平和条約発効満八年目に、はじめて本土と呼応した復帰運動が本格的に発足した」といわれる年であつたし、結成式当日は、大会終了後「国際通り——安里——ひめゆり通り——開南——バスセンターまで」提灯行列が行われ「治道からも盛んな声援があり、また途中一般市民も加わり、三千人にもふくれあがる熱況ぶりであつた」といわれる。

「祖国九千万同胞と共に団結して、復帰の実現を図ろう」と、復帰協は「スローガン」の一つにうたつてゐるが、「日米安保条約、行政協定の日米交渉妥結」に始まり、アイゼンハワー大統領の沖縄訪問といったなかで、「祖国」への「復帰の実現」を求める声は、切実な響きを持ち始めていた。

板良敷とその弟子渡口の対話は、そのような動向をみごとに反映していたといつていいのではなからうか。「琉球の孤独」は、いつてみれば、「祖国復帰」への応援歌といつた趣がないでもなかつた。¹⁰

「琉球の孤独」が、復帰運動の高まりを背景にして書かれていたことは間違いないが、あと一点、それには、戦前の作品では注目されなかつた出来事が取り入れられていた。プチャーチン提督の率いる艦船の那覇滞在に関するもので、ゴンチャロフの『日本渡航記』でよく知られている、バジル・ホール・チェンバレンの琉球観とベッテルハイムのそれとの違いを指摘している箇所である。それは、「ベルリ日記」のベッテルハイム像に対する批判といった趣がないでもなかつたが、そのことよりも、ロシアの存在を鮮明にしようとしたものであつたといつていいだらう。そのことを、次の場面は如実に示していた。

「琉球側では、一人を主犯、他を従犯とし、何れも米合衆国の提督に引きわたすといつておりますが、どう致しましうか」

「と云うと？」

「米国の法律でさばいてもらいたいと云っておりませう」

提督は両手でぱつと払いのけるようにして「誤解をうけるのが分らんかっ！ 露国のプーチャーチンの耳に入つてみる、あの温情主義外交の中將に利用されるだけじゃないか」

「神奈川条約」を締結して那覇に戻つてきたペリー提督は、彼が不在中に起こつていたポアード事件の報告を受けて怒りたつ。そして「幕僚と各艦の主だつた將校」を召集し「我々は名譽ある祖国を侮辱した挑戦者琉球をこらしめる」といい、「ポアード事件の背後には、薩摩だけでなく日本政府の後押しがあるかも知れない。この事件を重視せよ」と命じていた。それが一転していくのである。

「ペルリ日記」の中国、薩摩、米國、琉球の構図が、「琉球の孤独」では露國が加わり、世界のより立体的な政治力学が描かれたといえないこともない。

IV 九・二一と代理署名拒否と

長堂の「ペリー艦隊殺人事件」はその表題から分るとおり、「ポアードと云ふ男が那覇で死んで居るのが発見された」事件を取り扱つたものである。同事件は、先に見た山里や石野の作品でも取り上げられていたが、山里らのもとは大きく異なるものとなつてゐる。それは「ペルリ日記」や「琉球の孤独」よりもはるかに史実に寄り添つたかたちで事件をとり扱おうとしてゐることである。

作品は、「一八五四年（安政元年）六月十二日の昼さがり。那覇港の船溜りから臨海寺に至る細い海中道路をペリー提督率いるアメリカ東洋艦隊の水兵が一人、二十人ばかりの男たちに取り囲まれ、罵声を浴びながらよろよろ歩いてゐた」と書き出されて、十三のパートとエピソードからなるもので、1 水兵の死、2 王府の狼狽、3 犯人引

渡しの要求、4村頭以下四名の自首、5主犯の不在、6捜査の難航、7容疑者の取り調べ、8ペルリ的那覇港封鎖
通告、9ベッテルハイムの助言、10代役探し、11代役希望者の報告なし、12志願者の登場、13容疑者たちの解放、
14事件の顛末といった展開になっている。

作品は、ほぼ次のようにまとめられる。

レキシシ号ではポアードなる水兵が帰って来ないので、捜索して三重城の橋下に彼の死骸を発見した。暴力
によって彼の生命が絶たれたのが疑われたので、艦長は王府に嚴重な申入れをした。幾度か交渉の上、十五日
地方官国吉親方自ら聖現寺に臨時法廷を開き、関係者を糾明したが、証人の証言は甚だあいまいで艦長を満足
せしめなかった。

七月一日、ペリイ提督は江戸から帰ってこの不祥事を聞き、事実を審問して、水兵の死因は尋常ではないが、
婦女に暴行を加えた結果だから、加害者を深く追求するわけにはいかない。しかし将来渡来すべき欧米人の生
命を保護するために、事を不問に付することはできないと考えて、首里王府に交渉することにした。

七月三日、米側は若狭町学校所で総理官金武按司と会見し、犯人の引渡しを請求し、その回答を五日と決
めた。

五日、総理官は関係者一同を訊問して、ややその真相が判ったが、真の主犯者をつきとめることはできなかつ
たので当惑した。この時波の上のベッテルハイムが総理官に「これは心配するには及ばない。犯人がわからな
いなら、だれか代りの者を犯人に仕立てて差し出し、水兵の暴行自ら招く禍たることを述べしめたら無事にす
む」とひそかに教えた。王府は賞を懸けて代人を求めたが応ずる者がなかなかいない。評定所の公事拝（小使）
の田場というもの、平常から滑稽多弁であったが「御褒美望みのままなら私が出ようか」と同僚に冗談を言っ

た。これが総理官の耳に入ったので、呼び出して無理矢理に代人を命じたが、彼は固持して聴かない。総理官は「母を辱しめようとしたから殺した」と言えと教えて無理に押しつけて、七日田場と従犯者四名に縄をかけて通事とともに提督の船に行つて犯人として差し出した。

提督は事の真相を察知し、部下監督の足りなかつたことを謝し、物を被害者母子に与えてこれを慰め、また田場以下の者は殺人の罪を犯したから、琉球の法律に照して相当の求刑ありたしと、犯人を受け取ることを拒み、関係水兵は海軍裁判に附することを宣した。総理官は主犯田場を八重山島に終身流刑、従犯者は宮古島に八年流刑に処する旨を告げてこの事件はおさまつた。

のち、田場は褒美として大台所（役所）の下代に昇進した。大台所の下代は三石扶持でありその上相当の役得銭があつた。公事拝を十余年も勤めて初めて任用されるはずであるが、彼は一時の勲功でこの職を得たわけである。

「ペリー艦隊殺人事件」のあらすじは、ほぼ右のようにまとめられようが、右の文章は「琉米交渉の一挿話」として、比嘉春潮が「ペリー艦隊の来航」の章末に附してあるものである。比嘉は、右ように記したあとで「このことについてはいくつかの記録があつて、しかも皆まちまちのことを伝え、どちらが真実かわからないが」としていた。

ボナードが殺された経緯については、『日本遠征記』¹²に詳しい。そのことから「まちまちのことを伝え」ているというのは、「田場」に関する件についてのことである。そしてそのことが、山里や石野そして長堂の創作意欲を刺激したともいえるであろう。

山里は、そこに「忠義」の発露を見ようとした。「國の為」なら一身を投げ打つてもなんら悔いることはない

考える人物を創作していた。石野の作品も、山里の作品と発想をほぼ同じくするものであった。

長堂の作品には、「ペルリの船」に見られた青年の懊悩も、「ペルリ日記」で力をこめて書かれていた「御国の為」には身分の違いなどないという下僕の「忠義」といったようなのも見られない。では長堂は、「ペリー艦隊殺人事件」で、一体何を取り出そうとしたのだろうか。

「ペリー艦隊殺人事件」は、先にもふれたように六月十二日、水兵が、男たちに取り囲まれてよろよろ歩いている場面から始まっていた。そのあと、「水兵は臭い息をし、足元もおぼつかなかったが、よろけそうな足どりは酒のせいばかりではなかった。水兵は後頭部から血を流していた。顔もどす黒く膨れあがり、唇は切れて制服の白シャツを真っ赤に染めていた。帽子も被らず、下半身は裸で、一物が蝸牛の形に縮こまって股間にしがみついている。そのことは彼が何をしようと試み、男たちに追われているかを物語っていた」と、水兵の哀れな姿を描出したあとに「軍隊の駐屯するところ、婦女暴行の事件が発生するのは今も昔も変わりが無い」と書き記していた。

作品は、繰り返すまでもなく、事件の起きた一八五四年の六月十二日から七月十七日、ベッテルハイムを乗せてペルリの東洋艦隊が琉球を去るまでの一月少しばかりの間を描いているのだが、そこに、「軍隊の駐屯するところ、婦女暴行の事件が発生するのは今も昔も変わりが無い」と書き記していたのである。

「ペリー艦隊殺人事件」が、何に触発されて書かれたそれは語っていたといっているように、あと一点、事件が発生した時、「親方が御飯屋に王府同様事件発生第一報を入れたのは、薩摩藩の支配下に入った慶長年間から首里王府が漸次国土の防衛と外交権を委ねてしまっていたからで、王府は薩摩藩をさしおいて外国と折衝することを許されていなかったからである。首里王府の役人らは形の上では諸外国との交渉の場に国の当事者として出席して、いかにも外交権限があるように振舞っていたが、実際には一切の指揮は背後の鹿児島藩が執っており、問題

が複雑な場合は琉球人に変装した薩摩の役人が同席することも珍しくなかった」という首里王府の置かれていた状況が書かれていた。

「ペリー艦隊殺人事件」は、基地あるゆえに起こってしまった事件及び国を越えて直接に加害者の国との交渉を認めない国のありようをバネにして書かれたことは間違いないといっているだろう。

おわりに

ペルリの来航は、そのように時代によってそれぞれの書き方がなされてきたといっているだろうが、そのことで、触れておきたい作品があと一つある。大城立裕の「カクテル・パーティー」である。

同作品は、親善を目的として行われていると思っていた交流が、決してそのようなものではなかったということ暴露していく熊のものであるが、それが何によつて暴露出されていくかといえば、他でもなく、間借りをしている女のもとに通ってくる米兵によつて引き起こされた暴行事件をめぐつてであった。

そのことが、基地を抱えている土地においてどれほど切実な問題であるか多言を要するまでもないだろうが、その暴行の行われた年を、大城は「ペルリ百周年祭」が祝われた年に設定していたのである。

「琉球列島米国軍政本部特別布告第三十五号」の第一条は「一八五三年合衆国海軍提督マアシュー・シー・ペリーが初めて沖縄島的那覇港に上陸して米琉親善の実をあげてから九十七年目の記念日に当る一九五〇年五月二十六日を「米琉親善の日」とし、この日には全琉球の米国人及び琉球人共同主催の下に行われる意義深き儀式に琉球人を招待する」とうたい、第二条で「本布告は一九五〇年五月二十六日からこれを施行する。一九五〇年四月二十九日本布告を公布する」となっていることから明らかな通り、「米琉親善の日」の制定は、ペリーの那覇上陸を記念す

るかたちではじまっていた。

大城が、「米琉親善の日」として祝われた「ペリー来航百周年記念祭」の行われた年に、「暴行」事件の発生を設定したのは、極めて意図的なものがあつたことであつたといつていいのではないか。

「米琉親善」ということで、余りにも多くの事、物が覆い隠されてしまふ、というだけでなく、そもそも、ペリー来航を「米琉親善の日」として見る見方はおかしい、という意義申し立てを、「暴行」というかたちで差し出したのがほかならぬ「カクテル・パーティー」であつたと。

これが、明治、大正、昭和、平成の沖縄の作家たちが書いた、ペリー来航を素材にした作品の推移といつていいだろうが、あと一つ、では、ペリーの来航はアメリカ統治下に入った直後にあつてはどう受け取られていたか、といつたことがある。

そのことをもつともよく現している一文を次に紹介しておきたい。

日本及び琉球におけるペリーの果敢な活動が、因循姑息な島国の官民をふるえあがらせ、彼は完全に使命を果たすことが出来た。而し琉球占領に傾いた彼の個人的野心は、多数国民を代表する大統領によつて見事に圧殺された。

東洋流に考えると、凱旋将軍の後姿は誠に寂しいものであつたと思われるが、事実はどうであつたか。

それはそれとして、日本では開港の反作用も手伝い、封建体制はくづれ、その中から若々しい近代国家が生まれた。その新国家の手によつて、琉球の封建王国は解体され、その人民は新国家と融合した。ペリーの意思如何にかかわらず、彼の活動が、近代日本形成の契機となつたことは否むべからざる事実である。

今日われわれがペリーの名によつて思い起すことは、彼の個人的意図ではなく、その活動を規定した当時の

米国民の平和的な善意であることも強調しておく必要を感じる。

仲原善忠の論考「ペリー提督の手紙——附 オランダいものこと——」に見られるものである。

仲原の論考は、G・H・カーの『琉球の歴史』で論じられている「ペリーの意図及び行動に関する部分を抜き出して」考察されたもので、「ペリーは、沖繩を占領する意図をもっていたが、時の政府に斥けられて、すぐごと帰って行つた」ということを結論付けたものである。米国の統治下に置かれた沖繩において、米国と関わる事柄を論じるとすれば、どう論じたいか、そのことが如実にあらわれたものであつたといつていいのではなからうか。ペリーの武断的な外交を受け入れがたいものとして彼の提案を拒絶した大統領への注目をはじめ、そこには「米国民の平和的な善意」が働いていたといつたような指摘には、沖繩の行くべき道を考えれば、何に夢を託さなければならなかつたかということが鮮明に現れていたといつていいだろう。

注

- 1、「ペルリの船」の初出は、『沖繩毎日新聞』一九二一年八月四、五、六、七日の四日間、同紙に掲載された。
- 2、『山里永吉集』（一九三三年八月）に付された「執筆並に上演目録」による。山里の「ペルリ日記」は、発表と同時に大正劇場で上演されたとある。
- 3、ジョージ・H・カー『琉球の歴史』第九章 琉球と日本の西洋諸国への門戸開放」参照。
- 4、比嘉春潮「沖繩の歴史 六五ペリー提督の来航」、『比嘉春潮全集 第一巻歴史篇1』所収。
- 5、「廓情緒に酔つた詩人 樽花上問正雄」参照。仲程『新青年たちの文学』所収。

- 6、土屋喬雄、玉城肇訳『ペルリ提督 日本遠征記』「第七章」参照。
- 7、同時期の山里には「二向宗法難記」（昭和五年二月）、「首里城明け渡し」（昭和五年三月）等の作品がある。
- 8、『新聞三十年 沖縄タイムスが生きた沖縄戦後史』一九七九年十月十日、株式会社沖縄タイムス発行。
- 9、『沖縄県祖国復帰闘争史』一九八二年五月十五日、沖縄時事出版発行。
- 10、「琉球の孤独」は、昭和四十三年五月二十日朝日新聞社発行『守礼の国』に収録されるさい、主犯の代理で出廷する渡口が渡慶次に書き換えられ、他の部分にも書き換えが見られるが、その内容に関しては大差ないこと
で、ここでは『新日本文学』に発表された作品を使用した。
- 11、ゴンチャロフ著『日本渡航記 フレガート「バルラダ号」より』第一刷一九四一年四月、岩波書店刊、参照。
石野が、『ペルリ提督日本遠征記』の訳書だけでなく、ゴンチャロフの著書の訳書を参照していることは間違いない。大熊良一著『異国船琉球来航史の研究』一九七一年四月二十五日 鹿島研究所出版会発行。
- 12、土屋喬雄、玉城肇訳前掲書「第二十五章」参照。
- 13、『那覇市史 戦後の社会・文化1』資料編第3巻2所収「第3章 琉米親善政策」参照。
- 14、一九五五年一月号『おきなわ』第四十三号、第六卷第一号。